

釧路湿原自然再生協議会再生普及小委員会

環境教育ワーキンググループ(第2回)

議事要旨(案)

平成 19 年 11 月 16 日(金) 15:00~17:30

釧路地方合同庁舎 5 階 共用第 1 会議室

【出席者(敬称略)】

環境教育ワーキンググループ構成メンバー

<個人(所属)>

- ・ 大森享(北海道教育大学釧路校 准教授)
- ・ 神戸忠勝
- ・ 新庄久志(釧路国際ウェットランドセンター主幹)
- ・ 高橋忠一(北海道教育大学釧路校 准教授)
- ・ 永瀬知志

<団体(出席者)>

- ・ 阿寒国際ツルセンター(太田幸)
- ・ 釧路市民活動センターわっと(成ヶ澤茂)
- ・ NPO 法人 環境把握推進ネットワーク - PEG - (照井滋晴)
- ・ NPO 法人 釧路湿原やちの会(雑賀重二)

<教育行政関係機関(出席者)>

- ・ 北海道教育庁釧路教育局社会教育指導班(岩崎撰也)
- ・ 鶴居村教育委員会管理課学校教育係(佐藤直人)

<関係行政機関(出席者)>

- ・ 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所(北沢克巳)
- ・ 国土交通省北海道開発局釧路開発建設部治水課(吉村俊彦)
- ・ 林野庁北海道森林管理局釧路湿原森林環境保全ふれあいセンター(中島章文)
- ・ 釧路市《釧路国際ウェットランドセンター、釧路湿原国立公園連絡協議会》
(福田芳弘)

環境教育ワーキンググループ事務局

- ・ 環境省北海道地方環境事務所釧路自然環境事務所(川淵義昭、露木歩美)
- ・ 財団法人北海道環境財団(久保田学、山本泰志、内田しのぶ)

【議事概要】

事務局 第2回環境教育ワーキンググループ(以下「環境教育 WG と表記」)を開催する。
(配布資料の確認)

議事1 アンケート調査の実施結果について

(以下、高橋座長による進行)

座長 今回、2回目のワーキングとなる。前回の第1回ワーキングでは資料収集や情報収集として、釧路周辺の学校教育機関を対象として環境教育や釧路湿原を題材とした教育活動の実施状況に関するアンケート調査を行うこととなり、委員の方に了承をいただき実施した。今回のワーキングではアンケートの集計結果について、かなりの分量となったが、事務局にまとめていただいた。アンケート調査の結果について事務局からの説明を求める。

事務局 議事1に先立ち、これまでの環境教育 WG の活動についてご説明したい。資料2をご覧ください。(資料2に沿って説明：1及び2の項まで)

引き続き、湿原を題材とした教育の実施状況に関する調査結果の概要をご説明したい。(資料1-1に沿って説明)

座長 調査項目は多岐にわたり、回答数も多く大変だったことと思う。まず、結果に対して質問等あれば伺いたい。副座長より感想をいただきたい。

副座長 予想されていた通りかと思う。資料1-1の44ページに具体的な提案が書かれているが、2つに大別される。一つは湿原や再生事業についての具体的な情報を提供してほしいということ。もう一つは人的なサポートが挙げられている。現在実施している環境教育に対する参加者からの感想として、説教くさいものではなく体験的なものを求める等が出ている。こうしたデータを受けて、これから私たちが学校教育とどこでどうつながっていくのかを考える上で、参考になるデータである。予想していた以上にこの2点について、明確になった。

委員 膨大な資料が入手できた。今日の午前中に湿原で環境教育を実施している小学校に行ってきた。平成17年の学校における実施評価では、「5年生の子どもには捉えきれなかった」というものがあった。学校教育では加工されたものを学習し、発表するスタイルが進んでいる。しかし、実際の現実世界を読み解く力は遅れている。教師の感性に寄り添って指導する力が弱いことと、現実世界を見てもその内容を読み解くことができないということが理由と考えられる。感性に寄り添って指導する力と釧路湿原を知ることが必要。当時は釧路湿原再生の動きに対して、子どもにわかる教材を用意できなかったこと、教師が周辺の動きを十分に知らないことも課題として挙げられている。全国画一のカリキュラムが進み、地域を題材としたカリキュラム力は養われていない。そうしたことに対する情報提供とシステムが必要。教師は、教科書やナショナルカリキュラムに基づく指導は得意だが、目の前の教材

と格闘しながら子どもの認識を育てる力は不足している。この学校では、授業研究や実践の蓄積について、モデル化を要請されれば前向きに考えたいと言っている。

座長 根本的な話をいただいた。環境教育がうまくいくか、いかないかの分かれ目となる内容である。どんなことをすべきか考えていきたい。教育局いかがか。

委員 ほとんどの学校が取り組んでいるが意識の差が大きいということを感じた。教育局の学校現場への接し方としては、義務教育の方の学校教育指導の方から、環境教育の計画を立てて積極的な取り組みを学校に促している。初任者研修や 10 年研修において、湿原をステージとした研修や、環境教育に関する研修を行い、環境教育への取り組みを積極的にお願したいという働きかけをしている。結果案にある「阻害要因」については、「やはり」と思う。ゆとり教育からの転換が言われ、主要教科の時間数の増加を図り総合的な学習の時間は削減されつつある中で、さらなる逆風を感じている。

座長 ゆとり教育の見直しということで、総合的な学習の時間が年間 10 時間減らされるというが、アンケートによれば総合的な学習の時間において取り扱っている学校が多いので、たしかに阻害要因としてのイメージがある。学校教育は普遍的なことを教えなくてはいけないが、自然や社会環境はかなり地域的な面を含んでおり、環境教育は地域の特性に応じていくことが重要である。その時その場の現実に即することが必要であるが、委員の発言にあったように、これが教育の中で現在では育っていないという側面があるかと思う。

副座長 提案だが、できるだけ釧路湿原自然再生協議会のワーキンググループとして、どうアプローチできるかに焦点を絞って議論したい。環境教育がどうあるべきかを話し出すと非常に大きな課題でありきりが無い。アンケート結果から、現場が何を求めているかわかったのだから、それにどう応えるか、ワーキンググループならではの具体的な話をしたい。釧路湿原自然再生協議会のなかでも、あちこちの施設で子ども向けの取り組みを行っている。学校でも、教科で取り上げたいがどのように取り上げればよいかわからないという現場もあるはずである。そうしたことに対する知恵を出してはどうか。

座長 再生協議会で実現可能な取り組みを目標としたい。もう少し時間をかけて話してみたい。

委員 結果を見ると、小学校、中学校とも 8 割が環境教育に取り組んでいるということであるが、釧路湿原を題材とした教育活動の実施校は 3 割となっており、少ないと感じる。鶴居村では釧路湿原に面しており距離も比較的近いので、こうした教育活動はかなり活発に行われている。しかし、湿原からの距離が離れると確かに活発に取り組めないという現状がある。そうした学校では移動手段や交通費の問題があり、外部講師への費用の面でも制限があることを改めて感じた。他にも、どのよう

な教材を使ったらよいか分からないといった意見や教師の意識の問題についても大きな課題。授業時数の確保に学校は苦労している。学習指導要領の改訂で総合的な学習の時間が削減されるため、他の教科との関わりを見つけていく必要性を感じる。

委員 支庁では直接学校関係者と釧路湿原や環境教育というテーマで話すことはほとんどないが、アンケート結果を見て、なんとなく想像していたことが、はっきりと示された。これから環境教育に取り組む教員の負担を少なくするために出来ることがあるはずなので、ワーキンググループでいろいろ意見が出せるとよい。

座長 具体的に支庁の協力や支援が求められることもあると思う。

委員 実際に総合的な学習の時間を進めている先生と連絡を取るとは日常的にある。その指導を受けて市役所に来る生徒もいる。その中で漠然と感じていることがデータではっきりした。先生も悩んでいる。小学生も大学生も市役所に来て何を聞いたらいいか分からない状況。先に答えを想定してやって来る先生や児童もいて、どう対応すればよいか苦慮する。逆に、テーマを決め、質問を何十項目も持ってくる子もいるが、それはさておいて「湿原にいったことある？」という内容から始めている。30分くらい話をすると、関心を持ってきてきていることを感じる。これだけ情報が手に入りやすい時代に、インターネットでもすぐわかるような質問を持ってくることも多い。なぜわざわざ市役所に聞きに来るのか、自分で調べようとしぬいのか疑問を感じる。3年やってみて、どうしたらいいか、答えはまだ持っていない。

座長 単に訪問学習をこなすという意味合いが強いカリキュラム消化型、受入施設への丸投げ型ということか。

委員 河川管理の立場から、子どもや学生に環境に触れ合う場を提供するというスタンスで様々な取り組みを行っている。遠矢小学校を対象に植樹に参加していただいているほか、毎年、水生生物調査を実施しており、中学生に川に入ってもらい学生と我々で一緒になって調査をやっている。先生方は忙しく様々な制約条件がある中でどうすればよいか考えてみたが、環境に触れ合う場をこちらで創っていかなければ、なかなか前に進まないと感じる。また、教えるべき先生が湿原を知らないということがあると思う。多摩川の話だが、先生と生徒を源流に案内することの依頼が学校側から NPO にあった。そうしたことを我々からやってもいいと思う。

委員 以前、森林を題材とする環境教育の実施状況をアンケート調査したことがあるが、それと同様の実施状況、抱えている課題、教師の悩み等が挙げられており、共通している。森林を学習してもらおう場合にも、まず先生が森林に触れたことがなく、どう学習したらよいか手がかりを持っていない。そこで、先生方を対象に森林に触れていただく講座を年2回実施するなど、学校での森林学習のための情報提供を行っている。湿原についても同様な取り組みが必要だと感じる。

自然環境事務所長 事務局として、アンケート調査にご協力いただいた学校と教育委員

会、教育局の皆様にお礼を申し上げたい。まずは、迅速に結果をフィードバックさせていただきたい。アンケートにご協力いただいたお礼ということと、せっかく出来た関係を深めていきたい。また、学校間に情報提供することで、他学校の実施状況を見てもらい焦りを感じてもらえると良いかと思っている。アンケート結果について、環境教育の実施状況については、頑張っているという印象を持つ。全国では小学校 7 割中学校 5 割が総合的な学習の時間で 1 時間以上環境教育に取り組んでいると言われている。釧路湿原からの距離を考えれば、3 割の学校が湿原を題材とした教育活動に取り組んでいるのは予想以上と言える。学校からの距離が遠くても、集水域などでどこかで湿原とつながっており、どのように意識していただくかということ。本環境教育 WG が設立される前にもプログラムや人材リストをつくっているが、まず情報を出すこと、それを学校につなげる仕組みを考えなければならない。データでは、学校にも温度差があり、様々なニーズに対してどれだけきめ細かく情報提供やサービスが出来るかといったことかと思う。あまりできていないところに教材や先進学校の授業を見てもらう、人材の情報を出していくなども考えられる。そうした点で人材リストも活用していけるのではないかと思う。河川環境財団は全国 200 校を対象として各校 10 万円の助成を出しているが、そうした情報を届けることも必要。

座長 情報をきちんと出していくということであるかと思う。これまでのところを踏まえて、具体的に取り掛かれることを話したい。

委員 教育研究所の教育関係者の人名録(要覧)を見ると、いろいろな部会がある。そこに環境教育部会をつくれぬものか。私はガイドをしているが、5 年前に新任採用教師を集めて行う研修に関わった。10 年釧路にいても幣舞橋を初めて歩いたという人もいた。何年いても湿原に入ったことがない先生もいるだろう。ボランティアでガイドしてくれる人もいる。ビジターセンターなどでは、日時さえ決めれば先生を湿原に案内することもできる。先生を湿原に連れ出して勉強してもらってはどうか。そして実際に動くのは現場の先生達に委ねていくということができないか考える。

座長 具体的な問題点としては、担当教員が湿原に関心をもち、経験してもらう企画ができないかということが一つある。また、経済的問題や移動に関する問題、安全の問題へのノウハウやサポートがなく、手が出せない状況も感じられる。支援体制があれば、もっと出来ると思う。釧路湿原自然再生協議会には、釧路湿原に関わる専門家や市民活動団体もいるので、そうした人達にも少し参画してもらうプログラムを考えれば、少しずつ改善されると思う。いままでやっていないことであっても実現可能なプランを考えてみたい。それを課題にもう一度くらいディスカッションしたいと思うが。

副座長 アンケートを受けて資料 1 - 1 の p47-48 に考察が書いてあり、 から の課

題が挙げられているが、これを受けてどうするか提案を作らなければならない。それをワーキンググループで考えて再生普及小委員会に進めなければいけない。事務局の考えもあるだろう。

事務局 議事2になるが、資料2の裏面に事務局が考えたアクションを掲載した。アンケートの結果、予想以上に学校は湿原を題材とした教育活動に取り組んでおり、少数だが体系的な取り組みをしている学校もある。これらを情報として取りまとめ、先生向けの事例集・プログラム集を作成したいと考えている。

座長 次の議題に入りかけたが、もうひとつその前に話をしておきたい。釧路湿原自然再生協議会構成員等に対して行ったアンケート調査の報告を事務局より求める。

事務局（資料1 - 2に沿って説明）

座長 これから入っていく話に具体的に関わってくるものとなる。現実的にこういったことが可能ということが記載されており、具体的なアクションを考えていく素材になっていく。様々な団体、行政機関の皆様にご回答いただいているが、補足することがあれば出席委員よりお話ししたい。

委員 先生を対象にした指導テキストを作成するなどが考えられる。例えば、ネイチャーゲームは子どもが楽しんで学んでくれるので、それらを先生に伝授し、それを学校で活用してもらえたらと思う。タンチョウティーチャーズガイドは日本野鳥の会が作っているものであるが、プログラムに慣れないと進捗が難しいものも多い。より手軽にできるネイチャーゲームのプログラムなど実施が簡単なものを先生達に提案していきたい。

委員 子ども魚サミットを現在実施している。先週は釧路湿原の源流に行き、湿原再生の現場に22名の児童を連れて行った。また、塘路湖で地引網をやり、岩保木の水門や釧路川リバーサイドで説明を受けるなど、朝8時から夕方5時まで行って来た。学校全体で同様に実施していくことは難しい。今回、魚サミットのプログラムを4つ企画し各学校に案内を出した。当初は小学校5年生を対象としたが、4名しか集まらなかった。高学年を対象として23名が参加となった。興味を持っている子ども達を引っ張ってくるという形で、クラブ形式でやることも可能ではないかと思う。これらをNPOが受けても良い。春採湖での体験学習では、網を持っただけでも子どもの目が違う。体験させることが非常に重要で、今は魚をターゲットとして、釧路の水産と釧路を知ってもらうということをやっている。ターゲットを絞って、学校単位ではなく、テーマに関心のある子どもを広く集めて実施したほうが良い。

座長 場合によっては学校横断的なやり方もあり、そうした支援をしていく準備は出来ているということであった。

委員 学校が違って参加する子供達はすぐに仲良くなっている。子供達の順応性は高い。

委員 こうしたアンケート票をいただいた記憶がないが、学校教育との接点で考えると

弟子屈の小学校で1件のみ活動を行った。細岡の展望台で全校生徒10名程度であるが、「春を探そう」というテーマの中でネイチャーゲームや湿原を含めたクイズなどの学習を実施した。学校単位で行うとすると、人数が多いと動きにくいところもある。そうした学校に対しては、NPOや行政側がアプローチをとっていく必要を感じた。来年度以降は、出前授業という形で学校教育と関わっていきたい。また、こういったプログラムを実施してきたという情報を学校側に出すことで、NPO等に頼ることなく学校の中で自発的に進めていただくお手伝いをしていけたらと思う。

座長 入り口として、専門の方をお願いして、次第に先生自らが独自に実施していける協力をしていくことは可能であるということであった。

委員 上段に構えてということは厳しく、釧路湿原を見たり、感じたりというふうを持っていけたらと思う。湿原を見たいとか案内してもらいたいということは、基本的には料金が必要であるが、状況を見てお手伝いできる可能性もある。初任研修など、地元において地元のことを知らない先生も多いので、そういう人に釧路湿原を見てもらうことも大切。修学旅行の受け入れをしているが、東京から受け入れている学校の校長は道東地域が好きな方。埼玉の西部小学校では4年生が湿原に来て学習を実施し、5年生でアメリカ、6年でイギリスに行っている。そうした先生方は湿原が好きで、こういったものを児童に見せたいという思いを持っておられる。われわれ以上に関心を持っておられる。先生次第。多くの経験を子ども達にさせるということが重要。久著呂の川の掘れている場所などの現場を見ると、環境保護の大切さを実感として感じるのではないだろうか。とにかく現場を見てもらう手助けをしていくということが大切だと思う。協力できることはしていきたい。

議事2 環境教育ワーキンググループの活動について

座長 アンケート調査結果について、補足することなどあれば、無いようであれば、次の議題、先ほどの話題に戻ることになるが、これから具体的なプランを考えていきたい。事務局より、これからの環境教育ワーキングの活動への提案を含めて資料2についての説明を求める。

事務局（資料2に沿って説明）

座長 委員の皆さんよりフリートークで意見をいただきたい。アンケートの中で、このようにやっているという意見をいただいている。プログラム集と書いているが、現実に関今まで行われている釧路湿原を題材とした環境教育の事例集を作成し、それを見れば自身で先生たちが実施できるものにまとめなおしていくことを考えている。それらを学校機関に文書として配布したり、インターネットで公開したりということをしていく。問い合わせなどがあれば、実現に向けたコーディネート、支援も含めた事例集を作成していきたいということであった。そのほかにも、皆さんのほうで実施していけることがあれば平行して進めていけたらと考える。これに関してご意見があれば、

副座長 現在、取り組みを行っている学校を対象に情報収集を行うのか。

事務局 そのように考えている。

副座長 学校教育で行われている事例に、各種団体が実施している環境教育プログラムの事例を付録でつけていただきたい。また、今はやっていないがこれから、こういったものも実施していけるという事例など、これらは付録として付けてはどうか。こうすることで、いろいろな可能性を膨らませていけるのではないかと思うが。

座長 そのようにした方が情報を受け取る学校としては便利か。

副座長 この場に来ていただいている方は必ず出すということをお願いできればと思う。

委員 教師自身に情報を提供する、個々の教育技術を提供していくという話が出ていた。学校教育の土台を耕すという意味では、副座長がおっしゃったことを、きちんと入れる必要がある。しかし、学校には独自の問題があり、目の前にある地域、子どもの実情、実態を踏まえて、学校のねらいをつくり、カリキュラムに沿ってやっている。どんな子どもを育てるのかといった学校独自の問題がある。その領域に踏み込んだのが、学校教育環境事例集。先生達が個々の技術を知ったからといって、環境教育に転化するかとすると、公教育というものがあるので容易ではない。その土台を耕すものとして先ほど事務局より説明があった事例集があると思う。先行している環境教育を具体的にまとめなおす。個人的には、環境教育実践事例集を出したときに、どんな子どもを育てたいか、学力とは何なのか、地域から教材を生み出す視点は何なのか、そういったことを個人的には先生達との話し合いの中で明らかにしていく必要があると思っている。本日、そうした学校に行ってきたが、非常に好感を持っていただいております、そうした話があれば協力したいとおっしゃっていた

だいている。

座長 単なる報告レポートではなく、付録と言うか、第2部をつけるということかどうか。

副座長 約束してもらってはどうか。委員に書いてもらうということで、第2部はここにいる人に必ず出してもらうということで、そのように具体的に進めて行ってはどうか。

座長 第2部では、学校諸機関でこのようなことをやってきましたということを入れる。そうした構成を事例集に入れるということでいかがか。

自然環境事務所長 まずは、素材を集めさせていただいて、学校に使っていただくにはどのようにすればよいかというところをアドバイスいただけたらと思う。

座長 こうした事例集では、子どもにわからない文章、書き方が出てしまう。一般の人が読みやすいもの、誰でも読めそうな事例集にしていくということを含んでいただけたらと考える。そのようなご提案で中身が見えてきたが、そのほかご意見あれば。

委員 そういった具体的なプログラムがあるということは、現場にとってはありがたいことと思う。少し疑問に感じることとして、学校からもらったものをそのまま載せるということか。そこに環境教育ワーキングとしての意思を入れ込む必要、ワーキンググループとしてモデルプログラムとしての加工が必要だと感じるが。

座長 アンケートで書いていただいたことの丸写しということではないと考えている。子どもの感想文など、学校から資料を提供して頂くなどが必要になってくる。

事務局 各机に回覧資料として配布させていただいているが、環境教育指導資料の第3章にある実践事例の内容のようなものをイメージしている。ヒアリングを行いながら、どのようなまとめ方にしていけば先生方が使いやすいかということ、専門家にアドバイスを頂きながら進めていきたい。アンケート実施前には、事務局ではモデル的プログラムを作成していこうという想定もあったが、実際に実施されている学校があることが調査で明らかになったので、そうした取り組みの情報をまとめて発信していくことから考えている。

委員 環境教育指導資料について、第3章に記載された項目は一般的な実践事例集である。学びをしている主体である子どもの声を反映させたいと感じるが。

副座長 フォーマットをつくってみて、まとめていけば良いのではないか。あまり固くなく、半分くらいは自由に書けるくらいのもので。

事務局 あくまでも提示しているのはイメージなので、どのような内容でということは今後、提案をいただきながら進めたい。

委員 配慮いただきたいこととして、学校の規模によって違うということ。また、湿原への距離など、そうした学校の状況に配慮してまとめていただけたらと思う。学校現場では、いろいろな状況で負担も多いので、こうした資料があれば、現場での負担も減ることになるので良いのではないかと思う。

副座長 学校規模を書くのは難しいかもしれないが、距離というのは釧路湿原自然再生協議会としても興味がある。湿原との距離感がわかる地図なども見せていけたら良いのではないか。釧路湿原は大きいので、距離感が外部から見れば実感が湧きづらいが、現場の先生からすれば非常に距離は大きなもの。

座長 目的としては、学校の取り組みに役立てていただいたり、環境教育に取り掛かる仕組みを作るということであるので、それに役立ちそうなこと、有効なものは試行してみるということでしょうか。

委員 学校だけを頼らないで、湿原クラブのような形で子ども達を直接対象としたものも実施したほうが良いと考えるが、そうしたものも重要で、興味がある人は集まる。

座長 第2部というのは良い発想で、そうしたものも含められるということで考えたい。作る意味合いも高まったのではないかと思う。事務局の提案を追加、修正する形になったが、事例集あるいはプログラム集となっているが、そうしたものを作成するというところでよろしいか。

(意義なし)

座長 本日話し合う議題については、このへんとさせていただき、進行を事務局にお返しする。

その他

事務局 情報をいただいている委員よりご紹介いただきたい。

委員 2件情報提供をさせていただきたい。牛来元斜里町長のイベントの紹介をしたい。

知床世界遺産への立役者であり、トラスト運動のコア。湿原についても同様な状況かと思うので、情報提供までに。2点目として、ジュニアリーダーコース道東について。子ども達と関わって授業を行ううえで、私たちがこのようなことを押さえて進めているということで情報提供をさせていただいた。学校教育でできないことを社会教育でできるという面もある。子ども達の教育に携わるということで気をつけなくてはならない点を押さえている。子供達の発達段階、課題の設定の仕方などがあると思う。2泊3日の事業で約78名の中学生、高校生が集まっている。かなり意識が高い子ども達が集まっている。事前の研修会でミッションを与えており、子ども達に課題をあらかじめもって参加してもらっている。例えば、環境では負荷低減のために何ができるかなど、そうした課題を与えた。アイスブレイクを重要にしており、約1時間とっている。地域づくり、街づくりということで意識付けの講演、その後、ワークショップ。それぞれのグループからワークショップの時間を延長させてもらえないかといった申し出もあり、自主的に行っていた。フィールドワークでは、子ども達に意味のある体験をさせたいということで、訪問先では何十回と打ち合わせを行っている。主催者側のねらいと受け入れ先とでしっかり共有を行ったうえで、それぞれの担当者が何十回とやりとりをしている。語る広場では、グループごとに工夫をこらしたプレゼンテーションを行っていた。以上、紹介ということで。

事務局 次会の開催は、翌年度の春を予定している。事例集の報告やこの段階で出来ている素案を提示し、意見を伺いたい。

以上をもって本日の環境教育WGを終了とする。

以上